

NPO法人



2014年12月15日
第24号

Jomon Shiba



特定非営利活動法人
縄文柴犬研究センター

もくじ

キューと歩く小さな森で—四季の変化を感受する ☆石川県 黒梅 明	2
土や草を喰う犬 ☆JSRC副理事長 五味靖嘉	3
私のオオカミ進化論 その1 ☆生命の星・地球博物館名誉館員 中村一恵	4
シバの散歩道(24) ☆JSRC理事 根深 誠(文筆家・釣り師・元登山家)	8
お便りコーナー	
☆岐阜県 中尾洋一 ☆秋田県 藤原秀樹・庸子	12
☆神奈川県 佐藤 律	13
☆神奈川県 石田久光 ☆神奈川県 高橋守一	14
☆栃木県 坂本 勝	15
奈良と和歌山のミニ交流会! ☆和歌山県 土山仁美	16
☆大阪府 有藤一人	17
雷神・紗季だより その13-4頭の仔犬を送り出して ☆京都府 金 平雄	17
犬といっしょに自然体験のある暮らしを ☆和歌山県 和田 修	19
良子の近況 No.16 ☆富山県 竹内誠一	21
事務所報告 ☆新入会 ☆寄付金 ☆会費 ☆保存協力金 ☆仔犬登録 ☆その他お知らせ	21
☆寄贈・文献紹介	22



五味靖嘉画 1976年
ハヶ岳 (パステル)

JSRCでは、メーリングリストを実施中です。参加ご希望の方はメールアドレスを登録しますのでお知らせください。

25号発行予定:2015.2.25頃です。原稿の締め切りは、2015.1.15日頃です。

新年度の総会は、昨年と同じ会場、岩手県「つどいの森」にて、2015.4.18~19日に開催します。(詳細は次号)

会費や寄附などをお寄せいただいた方の氏名・県名を掲載させていただきますが、匿名を希望される場合は、お知らせください。

特定非営利活動法人 縄文柴犬研究センター

会事務所

郵便振替口座 02280-2-106951

〒 014-0073 秋田県大仙市内小友字堂ノ前119番地5

TEL 0187-68-2976

<http://www.jomon-shiba.com/>

encounter_shiba@jomon-shiba.sakura.ne.jp

キューと歩く小さな森で—四季の変化を感受する

石川県 黒梅 明

いつも散歩する小さな森がある。その散歩から帰ってくると、キューの体に植物の種が幾つもくっ付いていました。クルミの落ちる音に耳を立て、藪の中に突撃してそのクルミを銜えて駆け回るキューですから、この時季は植物の種がたくさんつきます。私のジーンパンにも付いています。付いていたのはヌスビトハギの実です。ヌスビトハギはマメ科の多年草で、夏に淡紅色の小さな花がスッと伸びた枝に咲き、風情は萩によく似ていますが、萩とは違って垂れ下がらず、ちょうど人の膝くらいの草丈なので、人や動物が通るとヌスビトハギがしっかりとくっ付いて離れません。ヌスビトハギ（盗人萩）という名は、盗人が足音を忍ばせて歩くときの足跡に実の形が似ているからだそうです。豆果が人の衣服にくっつくのが難点で、盗人などと言われたんでしょうか。私には半月か、福笑いの目のようにしか見えないのですが、、、。いわれを聞くと、先人の植物を見る細やかさと飄逸な知恵を感じ、日本人が動植物と共生する暮らしを営んできたことがよくわかります。

MLで紹介された「ヒューマン・アニマル・ボンド（ブルース・フォークル著・ペットライフ社）」を読み出したのですが、まえがきに「全てが関連しあっている。大地に降りかかってくることは、すべて大地の子孫にも降りかかってくる」というアメリカ原住民の酋長の言葉が載っています。ここでは、動物なしでは考えられない人の生活を言っているのですが、私には自然界の生き物全てのことを言っているように思えます。自然界の生き物として人間は生き、自然の恵みを利用し、自然と共生して暮らしを営んできたはずなのに、今や自然界の征服者のように利用し尽くし、破壊することを何とも思っていないような有様です。万物は連関し、補完しあい、すべてに侵してはならない存在意義があると私は思います。自然界の法則を放棄したこのありさまでは、人間自身が破滅に向かっているように思えます。

毎日同じ森を歩いていると、四季の変化とそこに棲む動植物の生態を感じます。この変化はぼんやり歩いていると気づかないのですが、昨日は見えなかったものに今日気づいたり、去年は見えなかったものを今年になって気付いたりして、それを写真に撮ったり、図鑑で調べたりしています。この森の散歩はキューが生き生きと駆け回るだけでなく、私にとってもリラックスと学習の場です。私はこの森で動植物と出会い、新

キュー:飯山駒房-飯山・2011.07.07生(藤の黒駒×新田の夏女)



鮮な空気を吸い、自然の恵みをいただき、キューののびやかな成長を確かめています。

人の生活ごみが捨てられていない、殺虫消毒剤が散布されていない、コンクリートによる護岸工事がされていないことが、この小さな森を自然が息づくものにしていくようです。この森で今年多く見かけたのはタケノコ、桑の実、クルミ、クリ、アケビで、ムカゴ、マタタビはさっぱり年でした。昨年多く見かけた亀やヤマカガシとの出会いは少なく、シマヘビの脱皮が多くみられました。この森で採れたものを私の勤める高齢者施設の婆さんたちにおやつや食材として持っていくと喜ばれます。今年はニセアカシヤ（ハリエンジュ）の花房と葛の芽をてんぷらにして喜ばれました。

この小さな森をキューと一緒に散歩し、縄文柴犬（キュー）の行動を見ていると、採集と狩猟生活の中で犬と共生した縄文時代の人の暮らしを思い起こさせられます。そして、この犬種を私たち日本人の文化として継承していく責任を感じるだけでなく、この犬種の特性を維持できる自然環境を守る責任をも私は感じるのです。

(2014.10.13)

土や草を喰う犬

JSRC副理事長 五味靖嘉

少し前のことになるが、「土を喰う犬」の紹介の中に、以下のような文章を書いた。

“1993年10月生まれの雌犬「フウ」と呼んでいる当年12歳のこの犬は、ここまで医者知らずに、全てにおいて健康で過ごしている。寄る年波には勝てず、近頃は視力が衰え、眼球が濁り始めた。しかし、嗅覚・聴力は一番で、何事もいち早く感じ取るという鋭敏さを備えている。言うまでもなく皮膚病など一度も経験がないし、蚤やダニ、寄生虫などで飼い主を困らせた事もない。”

この記事を書いた後に、中村一恵先生から、「動物たちの自然療法—野生の知恵に学ぶ」シンディ・エンジェル著（紀伊國屋書店・2003刊）を紹介していただいた。その文献に、「土を食べて毒を消す」「食べる土を選ぶ」という見出しがある。その中に、植物を多く食べる動物には二次化合物の解毒と関係があり、特にナトリウム不足と関係があるのではないかということが書かれてあった。それからもう10年余りの歳月が流れ、このテーマは書こうと思いつつも今まで中々書けなかった。

「土を喰う」ことは、地球上では様々な例があり、また各国に見られるようである。テレビなどでも放映された、野生動物のゾウやシカなどが、危険を冒してでも土を食べる事が知られている。人間の場合では、伝統的な暮らしを守っているオーストラリアや東アフリカ、中国、西洋などで、妊娠した女性に見られ、古くは人類の祖先たちにもあったようである。

下痢治療や胃腸障害など、解毒作用やナトリウムなど様々なミネラル補給にも効果があり、名前を変えて人の治療薬剤にもなっている。その有名な物質の一つは免疫抑制薬として、1984年3月、茨城県筑波山で採取した土からタクロリムスを作り出す放線菌を発見したことである。また、土壌に関する分野で微生物は新しい薬の宝庫として、様々な開発が進められている。

体調の良い犬は、草・土など食べない・迷信だ！と言う専門家の文献も見かけます。しかし、体調が良いから食べないのではなくて、体調を維持する上で祖先から受け継がれている、と理解したほうが自然である。縄文柴犬は塩分を求め、排尿を舐めることがあるし、外科的な傷の治療として、良く舐める事を繰り返す。唾液に含まれる殺菌作用で、一般的に知られているのはブドウ球菌、大腸菌、連鎖球菌などの抗菌物質が含まれ



健康な犬フウ ↑

フェンスに登る ↑

↓フウが食べたのは鉄分が多く含まれる粘土層



ている。

身近な植物、ドクダミ（ドクダミ科ドクダミ属の多年草）などは、人の整腸剤とか食材として昔から活用されていたが、これはイヌも好んで食べる漢方薬である。イヌが様々な草を食べ（ここではイネ科などを念頭に）、胃の中のを吐き出す事もあるが、ナトリウム不足とも関係があり、下痢の症状も病原体や毒を取り除く作用がある。縄文柴犬を観ていると、体調が優れない様々な理由がある時は自ら、絶食し、ひたすら休息をして保温し、自然治癒力に専念する（例：マムシに咬まれても同様の行為が観られる）。彼らが、時に嘔吐をするのも毒や病原体を排出する反応行為（それとは別な理由もあるが、ここでは省略した）であり、これは長い歴史の過程で、野性的・原種的に自然淘汰され、その結果、遺伝的に備わっているからであろう。

(2014. 10. 25)

交流会開催場所の募集中

開催して欲しいという要望がありましたら、事務所までご一報下さい。締め切りは3月末まで!

私のオオカミ進化論 その1

生命の星・地球博物館名誉館員 中村一恵

はじめに

オオカミ類はどのようなプロセスで誕生し、そしてそのオオカミからイヌはどのように生まれたのか、愛犬家の多くの方々が興味を抱く問題かと思う。2014年2月に私は「ニホンオオカミとアカオオカミの起源と種分化に関する考察」と題する論文を発表した。ハイイロオオカミ(図1-1)、アカオオカミ(図1-2)、ニホンオオカミ(図1-3)の3種のオオカミ類の起源と進化に関する仮説を大胆に提示した論文である。仮説を提示し、検証することは必要不可欠であるが、新しい事実が見つければ、砂上の楼閣のようにあえなく崩れてしまう運命にある。だが、たとえ拙論が崩壊したとしても、ニホンオオカミというミステリアスなイヌ科動物に多少なりとも光を当てることができれば、望外の喜びである。本誌編集者からのご依頼に応じたのは、拙論をベースにしてニホンオオカミの進化を語ることは無駄ではないと判断したからである。

我々は日本本土にいたオオカミを滅ぼしてしまった可能性がある。しかし消息を絶って100年以上の時の流れの中で、現在もなお、ニホンオオカミの生存を信じ、関心を抱く人は後を絶たない。絶滅したのであれば、その原因を究明することもまた研究者の果すべき責務と考えている。テーマをオオカミ類の進化に特化させるのではなく、地球の環境史にも光を当て、また筆者の専攻する生物地理学の知見を導入したオオカミ進化論になるよう努めたい、そう考えて執筆した。

地球に起きたイベントの数々

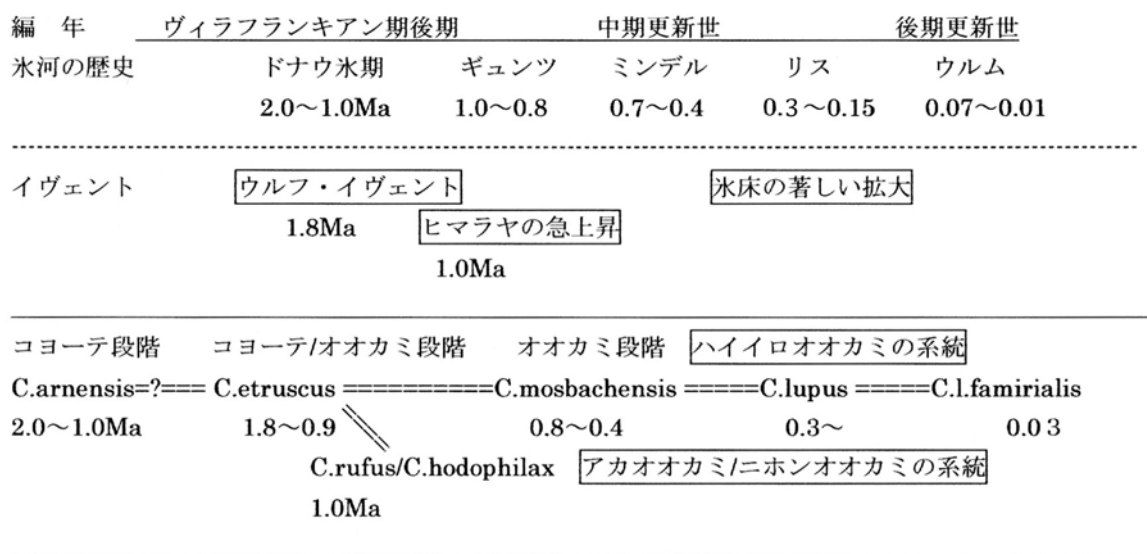
「各種イベント」といった用語は、最近では「催しもの」の意味で定着した感のある言葉となっているが、地質学上では「出来事」とか「転換点」くらいの意味で使われるものである。表を見ていただきたい。ウルフ・イベントが本題の最初のキーワードとなる。このイベントが起きたのは1.8MaBPである。表では1.8Maと略して書いた。1Maは100万年であるから1.8Maは180万年前の意味となる。

イベントはそればかりではなかった。アフリカプレートとインドプレートがユーラシア大陸に衝突したことによって、太平洋から大西洋まで巨大な山塊の連なりが形成されたのである。さらに100万年前にはヒマラヤ山脈が急上昇し、チベット高地と合わせた世界最大の地形の高まりはインド洋の湿った気流を遮断し、ヒマラヤ・チベット山塊を境に乾燥した西南アジアと湿潤な東南アジアとに二分した。

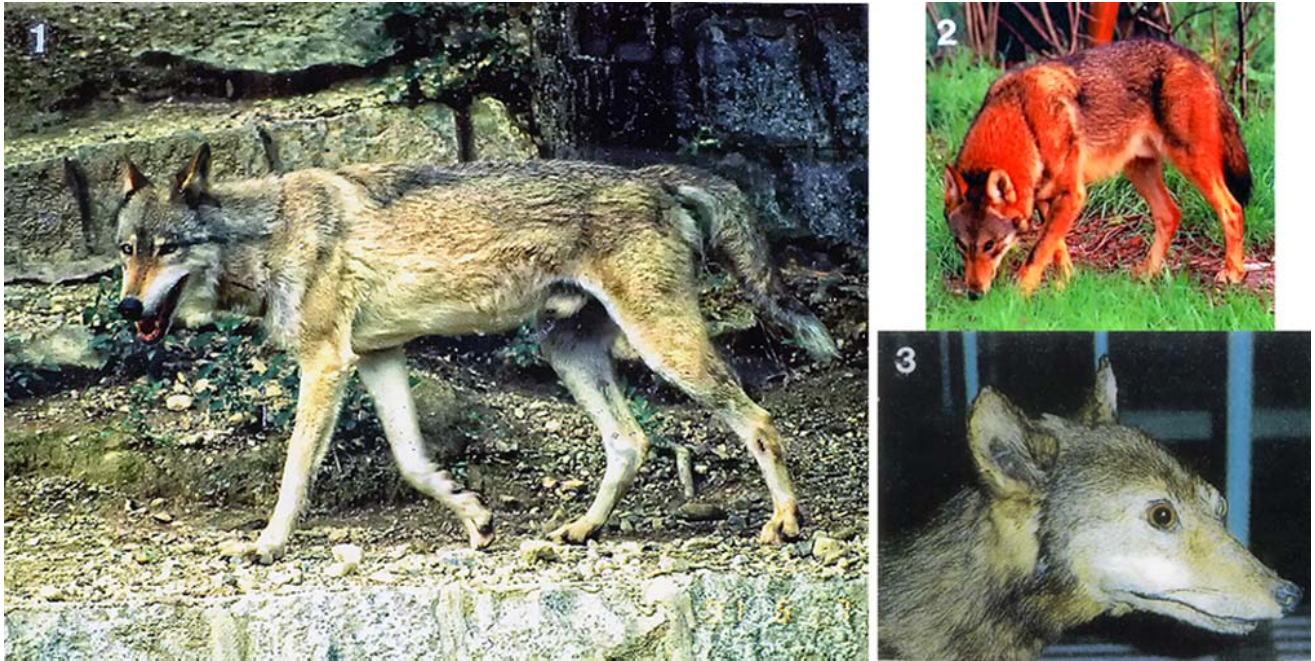
よりマクロにみると、太平洋から大西洋まで連なる巨大な山塊の形成はユーラシアの中緯度から以北の極域までの広大な地域をステップ地帯に変えてしまった。こうした環境の激変に反応して、森林の生きものたちの、あるものは死に絶え、あるものは移住して棲息場所を変えたにちがいない。

マンモス・ステップと呼ばれる広大な大草原地帯が誕生し、ケナガマンモス、ステップバイソン、ケサイなどの巨大草食獣類やステップライオンの生きる世界を支えたのが大草原の生物体量(バイオマス)の大きさであった。現在のユーラシア北部に帯状に分布するツンドラとタイガの世界か

表 1.ユーラシアにおけるオオカミ類の進化史(中村,2014a に基づき作製)



C.arnensis ムカシコヨーテ, C.etruscus: ウルフコヨーテ, C.mosbachensis: モスバックオオカミ, C.lupus: ハイイロオオカミ, C.l.famirialis: イヌ, C.rufus: アカオオカミ, C.hodophilax: ニホンオオカミ

図1. 世界のオオカミ 1:ハイイロオオカミ *Canis lupus*, 2:アカオオカミ *Canis rufus*, 3:ニホンオオカミ: *Canis hodophilax*

ら、つい1万年前まで存在したマンモス・ステップの光景を想像することは困難であるが、現在の東アフリカのサバンナの光景を思い浮かべていただければよい。数例挙げるならば、ケナガマンモスはアフリカゾウに、ステップバイソンはアフリカスイギュウに、ケサイはシロサイに、ステップライオンはアフリカライオンにと、それぞれ生態的に対応した大型哺乳類が棲息している。

オオカミ類は3段階をへて進化した。

ここで再び表をご覧ください。学名が多くてわずらわしいと思うが、系統分類を抜きにしてオオカミ類の進化を述べることは不可能であり、それには具体的な種を特定するための学名が不可欠になってくる。ここではイヌ属に限定して学名を表1の欄外に付記することにした。学名、和名の順に記載してある。

3つの段階に分けて、オオカミ類の系統をたどることができる。まず、コヨーテ段階は、ウルフコヨーテと同じヨーロッパ南部に棲息した小型のコヨーテ類であり、表では疑問符を付けてあるのは、ムカシコヨーテとウルフコヨーテの系統関係が明確ではないためである。しかし、分岐せずに異なる系統に進化(向上進化的変化)する場合もあるから、このムカシコヨーテがウルフコヨーテの直系の祖先種である可能性を完全に否定することは難しい。この問題はこの程度に留めておきたいと思う。180万年前に出現したウルフコヨーテはオオカミ類進化の根幹をなす化石種であり、その名のようにコヨーテ類とオオカミ類の両方の特徴を合わせ持つ動物であったと考えられる。この種を留め置くことはできない。

レフェジアとしての環日本海地域

先にヒマラヤ・チベット山塊がアジアを二分したと述べたが、乾燥した氷期であっても、東南アジアから東アジアへは乾燥経験の少ない回廊が開けていた。気候の寒冷な時期には、生きものたちは北方から南下し、温暖な時期には南方から北上できる回廊の役割を果たしていた。

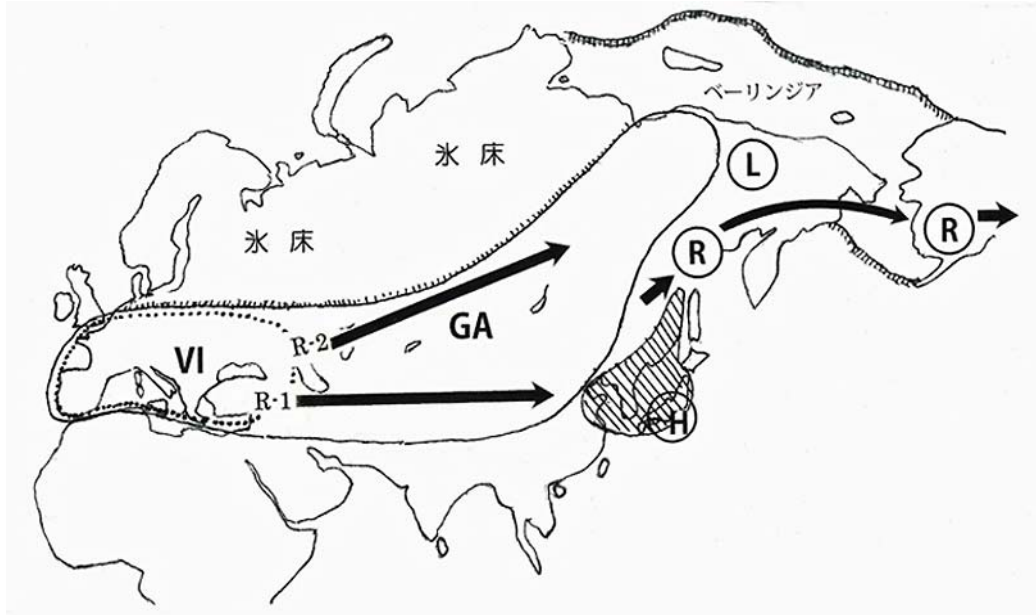
日本産の蝶の分布の研究から|北区にも東洋区にも属さない「西部シナ系」は中国西南部を中心に分布する生物の一群で、西はヒマラヤ山脈南麓にそってネパールまで、東は台湾、中国西部、九州、朝鮮半島、本州西部まで広がっている。この動物地理区は、植物地理学で「日華区系」と呼ばれる地理区と部分的に重なっている。

ヨーロッパのウルフコヨーテも、試練の時を迎えた。ドナウ氷期より厳しい環境をもたらしたギュンツ氷期を目前にして、それをかわすために東アジアへ棲息場所を追跡したと考えられる。ウルフコヨーテは棲息場所を変えることで生き延びることができたのであろう。

このような現象は、何もウルフコヨーテに限ったことではなく、タヌキ、ニホンジカのようなシカ亜属のシカ、ニホンザルのようなマカカ属のサル、ドール、ツキノワグマにも言えることであり、アジアからヨーロッパに進出し、アジアへ舞い戻ったのも、氷期の影響を受けてのことであったにちがいない。東アジアの日華区系区に含まれる環日本海地域(図3の赤線部)はユーラシアでも有数の氷期のレフェジア(避難場所)であったのである。ウルフコヨーテからニホンオオカミが分岐した年代を100万年前と推定した。

図2 2種の化石オオカミの分布と分散およびハイロオオカミの発祥地 (中村, 2014を改変.)

VI: ヴィラフランキアン期後期のウルフコヨーテ *Canis etruscus*, G: ガレリア期のモスバックオオカミ *Canis mosbachensis* の分布域. この種から亜寒帯の大型ハイロオオカミ *Canis lupus* へと進化した. 線部は環日本海のレフェジア (氷期の避難場所) の位置. H: ニホンオオカミ, R: アカオオカミとその想定分散経路. L: ハイロオオカミの推定発祥地. 全氷期を通じ, ペーリンジアは陸化し, ユーラシアは北米大陸と陸続きとなった.



2つの個体群に分化した

東アジアに棲息場所を追跡したウルフコヨーテは、その地で生殖的に隔離されて2つの個体群に分岐した(「ダーウィンの分岐の原理」と考えられる。1つは、後にアカオオカミとなる個体群、もう1つはニホンオオカミとなる個体群である。資料に乏しく現段階では詳しい解説はできないが、個体によっては両種の後肢下部の外側と内側に縞模様が出る。ハイロオオカミには認められない特徴である。

生物学には同じ生態的地位を占める2種は共存できないという法則(ガウゼの法則)がある。2種のオオカミ類はごく近縁な関係にあったのだから、一方が残り、他方が分散して競合を回避した。現在の分布から、ニホンオオカミは環日本海地域に留まり、アカオオカミは北上してペーリンジア経由で北米東南部に達したのであろう(図3)。

東アジアの大陸部からニホンオオカミが消えたのは、100万年前にイヌ属の原生ジャッカル類から分化したドールが関係したのではないか。シベリアから中国、インド、東南アジアに広く優勢なイヌ類となったドールとの競合置換が起きた結果と私には思われる。

歯帯が語るオオカミ類の系統

上顎第1臼歯の歯帯階近くで歯冠をベルト状に突出する歯帯の形状の違いにはイヌ類の系統が反映されている。ジャッカルやコヨーテのような原始的な種ほど歯帯のベルト状は明瞭である。ドールやリカオンも明瞭である。同じハイロオオカミでも、インドオオカミ、アラビアオオカミ、

エジプトオオカミ等インドオオカミ群の歯帯の形状は通常明瞭であるのも、インドオオカミ群がハイロオオカミの原型に当たる古い起源の個体群のためと考えられる。80~40万年前に棲息したモスバックオオカミが、その母体と考えられる(表参照)。モスバックオオカミの歯帯の形状は不明であるが、明瞭と予測できる。

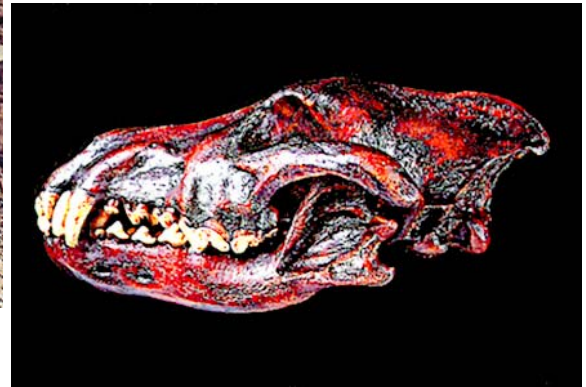
一方、起源の新しいチョウセンオオカミ、エゾオオカミ、シベリアオオカミ、アラスカオオカミ等のハイロオオカミ群では歯帯の形状は通常不明瞭である。興味深いのはニホンオオカミの歯帯の形状である。その形状は、どちらかと言うと北方系ハイロオオカミよりはアカオオカミに似て、概して歯帯は明瞭である。アカオオカミと近縁な関係にあることは先に述べたが、その傍証となるであろう。ただし、オオカミ類の歯帯の形状についての私の調査数は十分ではなく、どの程度の変異があるのかは明らかではなかった。だが、論文が発表となった後に、ライターの宗像充氏が北海道と朝鮮半島のハイロオオカミと日本各地のニホンオオカミの歯帯の形状を精力的に調査され、私の説の弱点を補強して下さった(宗像, 2014.)。

ハイロオオカミの誕生

図3に示したのは、おびひろ動物園で見た北米の亜寒帯産大型ハイロオオカミである。完全な冬毛ということもあって、肩にはマント、頸部には立派なタテガミを備えていた。このためにいっそう体躯が大きく見えたのだと思う。もしこの個体がアラスカ産 (*C.l.pambasileus*) であれば、

図3 北米亜寒帯の大型ハイロオオカミ *Canis lupus subst*図4. ダイアウルフ *Canis dirus*

の頭骨, 頭骨全長31.1cm



肩高75-95cmぐらいに達していたはずである。このような亜寒帯の大型オオカミはどこで誕生したのであろうか。

表1に示されたように、オオカミ類はウルフコヨーテを祖先種として2つの系統に分れたものと考えられ、その時期は100万年前のヴィラフランキアン期後期(前期更新世)と推定したことは先に述べた。つまり、オオカミ類はおおよそ100万年前に2つの系統に分れ、ウルフコヨーテ→モスバックオオカミ→ハイロオオカミの系列は氷河・氷床を迂回するように北東方向に進出し、図3のルート2でベーリンジアに達し、ハイロオオカミへと進化した。一方、ウルフコヨーテ→ニホンオオカミ(アカオオカミを含む)の系列はあまり大型化することなく、図3のルート1で東アジアの暖温帯へと進出し、東アジアの環日本海地域で2種に分化したと結論づけた。

新しい棲み場所が開けると、それまでより拡大した食物資源は、より大きな体サイズ、また、より大きな個体数でも有利にする淘汰選択をもたらす。そして、「コープの法則」によれば、同じ系統に属する生物では、大きなサイズの種は進化の過程でより遅れて出現する。

ハイロオオカミをもってして、オオカミの系統の進化の頂点と見るのではなく、頂点はとうに過ぎているのだ。図4はダイアウルフの頭骨である。カリフォルニア州ロスアンジェルスのレストランのタールピットから発見されたものである。後期更新世末まで生存していた最大のオオカミである。4万年前から1万年前まで、北米を中心に棲息していた。

まとめ

ニホンオオカミは祖先種ウルフコヨーテから100万年前に分岐したと推定され、ハイロオオカミとは系統の異なる原始的なオオカミである。日本の固有種である。ニホンオオカミは東アジアでは絶滅し、最後の棲息地が日本3本土(九州・四国・本州)だけとなり、大陸とは隔離された島嶼で、おそらく数十万年間にわたり生きてきた。ウルフコヨーテはインドオオカミ(肩高65-75cm)ほどの大きさであり、ニホンオオカミでは40-55cm(Prater, 1971; 今泉, 2007)である。島嶼化によって「島のオオカミ」は大陸の個体群より小型化したと考えられる。

参考文献

- 今泉吉典, 2007. オオカミ. 世界大百科事典4:79-80.
 Mech, L. D., 1981. The way of the wolf. Swan Hill Press.
 森田正純・八木博, 2014. 海を渡ったニホンオオカミは90ヶ月生き延びた, その後・・・ANIMATE(11):11-18.
 宗像充, 2014. オオカミが来た!? 第4回. 望星, 45(10):80-88.
 中村一恵, 2014a. ニホンオオカミとアカオオカミの起源と種分化に関する考察. 神奈川県立博物館研究報告(自然科学), (43):23-32.
 中村一恵, 2014b. ヤマイヌの下肢に見られる縞模様について. *Hodophilax*, (2):4-5. 私家版.
 Prater, S. H. 1971. The book of Indian Animals. Bombay Natural History Society Press.

シバの散歩道 (24)

根深 誠 (文筆家・釣り師・元登山家)

隣家の、車道に面した生垣の、ちょうど目線を斜めに上げたあたりの込み入った枝に、ヒヨドリが営巣しているのを知ったのは、だいぶ成長した二羽のヒナに親鳥が頻りに給餌するようになり、ヒナがしきりに啼き声を立てて餌を催促するようになったからだ。幸いにも、ヒヨドリの子育てを、不潔であるとの理由から険悪な顔つきで除去したりするような人は近所にはいなかった。

世間は人さまざまである。ヒヨドリではないが、はるばる南国から渡来するツバメが自分の家の軒下や玄関先に巣をつくるたびに、グダグダと文句を垂れて除去する人がいる。

私ならそんなことはしないだろうし、南国の便りを伝えてくれる使者として喜ぶ、というような話をすると、その人は顔を歪めて腹立たしげにこう言った。

「あなたは経験がないからですよ。糞が玄関先のアスファルトの床に垂れ落ちて、それがどんなに汚らしか知らないからですよ」

潔癖症ではないかと思いつつ私は聞いていた。その人は中年女性だったが、糞を洗い流すことのたいへんさを、私に抗議するような刺々しい口調で話した。新築した家にツバメが営巣することが許せなかったのだ。クソ喰らへ、と私は言いたくなった。

私が思うに、ツバメの来訪はめでたいことではないのだろうか。四六時中、気かけながらツバメの子育てを観察し、その成長を愉しみ、毎年、ツバメの家族が南国へ旅立つ日を惜しみ、再び戻ってくる日を首を長くして待ち望むことの繰り返しが自らの内面を活性

化し、人生にとって幸せの構成要因になっていることを実感できるはずである。癒しを感じるのではないだろうか。

隣家の生垣で営巣し育ったヒヨドリの二羽のヒナが巣立ち、わが家のブナの木に停まって羽を震わせながら、親鳥ともども賑やかな啼き声を発し、給餌を受ける姿を見かけるようになった。近年毎年見られる光景なのだが、親鳥も幼鳥のころ、わが家のブナで過ごし、それが代々続いているのだと思われる。

そのヒナをカラスが狙っていた。ヒヨドリが営巣した生垣の、幅5mの車道を挟んで向かい側に立っている電柱の下がゴミ置き場になっているので、そこにゴミを漁りに来ているカラスの一族なのだろう。カラスが来るとシバが吠え立て、私が出て行って追い払う。ゴミを漁ることのできないカラスがヒヨドリのヒナを狙っていたのではないだろうか。

ヒナは二羽、そのヒナに襲いかかるカラスに親鳥が必死で叫び声を張り上げ、防戦していた。その叫び声を聞きつけて私が出て行き、ヒヨドリに加勢するのだが、カラスは私が家に入るのを見計らって攻撃する。

突然、カラスとヒヨドリの親鳥同士による空中戦が激化したようでヒヨドリのけたたましい啼き声が出た。カラスが突撃したのだ。あわてて飛び出すと、いつも停まっているブナの枝にヒナがいない。一瞬、さらわれたのかと思った。注意してみると、一羽は庭の草むらに落下し、物陰に隠れて危機を脱した。そもう一羽のヒナは、ブナの脇にあるイタヤカエデの枝に停まったまま怯えて動けなくなっていた。



↑ 田んぼに飛んでくるゴルフ球を、農家の人たちが拾って道端に寄せておく。



↑ ゴルフ場の脇の田んぼで田植え作業する人たち。

油断ならないカラスだ。もしかしたら去年、わが家の庭の草むらに落ちていた、産毛の生えていたカラスかもしれない。あのとき餌を与えてやったのだ。

わが家の狭苦しい庭で熾烈な生存競争を演じるカラスとヒヨドリだが、私の心配も嬉しいことに杞憂に終わり、その後、二羽のヒヨドリの幼鳥が親鳥といっしょに飛び回る姿を見かけるようになった。



イタヤカエデの枝に止まっています
カラスの攻撃を受けたヒヨドリのヒナ。

※ ※ ※

七月なかばを過ぎてもカッコウの啼き声が聞こえてくる。その啼き声を聞くと、農業を営んでいるわけでもないのに、今年は冷夏ではないかと気にかかる。昔であれば凶作だ。「遅くまでカッコウが啼くのは飢渴の年だと昔から言い伝えられてきた」という話を私は古老から聞かされたことがある。

しかし、遅くまでカッコウが啼くといっても八月に入ってから聞いたこともない。現実にはあったのかもしれないが、長年にわたって観察記録をつけていたわけでもないのたしかなことはわからない。

先日、カッコウではなくてアカショウビンの啼き声が飢渴、つまり飢饉に関係しているという話を農家の知人がしていたので、どこから仕入れた話なのかとネタ元を聞くと、淡谷悠蔵の『野の記録』「ケカツ鳥」に書いてあると教えられた。調べてみると、たしかに小説の題材に使われていて、その出所は柳田國男の『野鳥雑記』だった。

津軽地方ではまた赤ショウビンをジゴクドリあるいはケカチドリともいう。ケカチは飢渴の字音からできた語で、東日本は一带に凶作のことを意味している。ケカチの年ばかり多くこの鳥が出るわけではないから、

砂利道で見かけたスズメの轢死体。



単にこの鳥をその前兆として忌み怖れたのが起りかと思う(「鳥の名と昔話」)

いま、私たちの住む町や村では、カッコウの啼き声は聞こえてもアカショウビンは山でも行かないかぎり啼き声を聞くのは難しい。

毎日の散歩でちかごろ目につくようになったのはモズである。冬にわが家の庭でスズメを襲い、サワフタギの枝に串刺しにして食べている写真を以前、この連載で紹介したけれど、そのころはモズを見かけるのは珍しいことだった。

モズは八月に入って見かけなくなったが、それまでは電線に停まって、ジリリジージーと響き渡る声を張り上げている姿がしばしば目に留まった。アカゲラやノスリもちょくちょく見かける。キジバトは以前にくらべて見かけなくなった。

スズメにしてもツバメにしても珍しい鳥ではないが、路面で車に押し潰された轢死体や雨に打たれて飛べなくなった幼鳥を見るのは珍しい。ずぶ濡れになって飛べなくなっていたのはツバメだった。ネコやカラスにでも襲われはしないかと心配で、雨上がりに通りかかったとき、その場所を注意してみたのだが、襲われたような跡も見当たらないので飛び去ったのだろう。砂利道で車に轢かれて押し潰されたスズメの幼鳥は、運転手が気づかなかったのか、それとも気づいても轢いたのか、そのへんは定かでない。

姿を見て気持が悪いのはヘビである。ヘビは苦手だ。散歩中、ヤマカガシを以前はよく見かけたものだが、ちかごろはいなくなったのか、目につかなくなった。環境に変化が起きているのかもしれない。何年前からそう思いはじめたのは、カルガモが川に姿を見せなくなったのがきっかけだ。新しく温泉が開発されて以来、そこからの排水が水路を通して川に流されるようになったのが原因ではないかと思う。

散歩中の道端で見かけたジムグリ。



川に入れなくなったカルガモが、雨の降ったあとの、放棄された田んぼの水溜りに姿を浮かべていることがあった。日々散歩しているとさまざまな事象が目につく。水溜りのカルガモにしても、その因果関係を考えれば憂鬱になる。道端に放置された自転車も然り、ときどき目にするのだが、乗り捨てられた盗難品ではあるまいか。

先日、ジムグリを見かけた。マムシやヤマカガシは以前、目にしているので珍しくはなかったが、散歩コースでジムグリを見るのははじめてだった。

※ ※ ※

日々の散歩の中で、相変わらず不可解なのは、ネットを越えて飛んでくるゴルフの打球と犬猫看板である。ゴルフの打球が田植え作業の農家の人たちを直撃したりしていることについては以前、この連載でも触れたけれど、別の方角の住宅地にまで飛んで行って民家の窓ガラスを破損させている。ゴルフの打球にしても犬猫看板にしても市民生活を抑圧するものとして明らかに改善されねばならないはずなのに、加害者も被害者も知らん振りする体質は、この地域に代々蔓延してきた旧来の陋習である。

私が子供のころの思い出話を披露すれば、私は近所の遊び仲間や幼稚園で、いまとなっては原因はわからないがたびたび悶着を起し、仲間はずれにされることが多かった。もちろん立ち向かっていき喧嘩もするし、多勢に無勢で負けることが多い。怪我を負わされたこともあった。自分の主張は間違っていないはずなのに、どうしてこんな目に遭わされねばならないのかと泣きながら母親に食ってかかったことがたびたびあ

った。母親はそのたびに慰めるように言ったものである。「おめえが黙っていればいいんだ、おめえががまんすればいいんだ」理不尽な目に合わされても黙ってみずからが苦痛や不満に耐えることで現状を維持するという風土は全国津々浦々あるのかもしれないが、それをいまの世にあって美德と考えているのか、私の郷土には濃厚に浸透しているのである。

ゴルフの打球が田植え作業をしている農家の婦人に当たっているの、どうして抗議しないのかと聞いたとき、抗議すれば、した人が悪者扱いにされるだけだ、とくぐもった口調で答えた婦人と私の母親の言葉はこの地域の陋習を言い当てている。そして陋習に絡めとられて生きなければならぬ不憫な個々の生き方を考えるとき、この地域社会もまた不幸なものに思えてならないのである。抑圧された庶民の救済が、昔ながらのイタコ・ゴミソにすぎることではかないとしたら悲しいのではないだろうか。

ついでにもう一つ、理解に苦しむ不愉快な体験を述べよう。

高校生のとき岩木山で大館鳳鳴高校の遭難を通報し、青森県警から表彰される一方、高校からは処罰されるという理不尽な仕打ちをされことがある。高校生が冬山で4人死亡するというセンセーショナルな事件だった。処罰の理由は、「あの生徒たちには冬山は危険だから行くなと言っていたにもかかわらず無断で行った」という事実無根の虚偽発言だ。当時の校長が世間体を気にし、弱者の私たちに犠牲を強いたのだと思う。それに対して、当時の教師の誰一人として私たちを弁護しなかった。「義を見てせざるは勇なきなり」

私が大人になってから、一年生のとき漢文を習った鈴木忠雄という教師と青森からの車中で偶然に出会ったのだが、「忠先生」がワンカップ4個を買い込んで



ゴルフの練習場から住宅地の車道にまで打球が飛んでくる。

きて二人で2個づつ飲んだ。東大漢文科を出た山好きな先生で「忠先生」と呼ばれて親しまれていたのだが、遭難事件当時は、新設される弘前南高校の準備で県の教育委員会に勤務し、弘前高校にはいなかった。

「忠先生」はワンカップをすすりながらこう言ったのだ。「ネブさんには教師として済まないことをしている。勘弁してほしい。私がいたら何とかしたんだが」

私たちを処罰した当時の自己保身的な校長も東大を出ていて、それを鼻にかける性癖があった。それにくらべて、「忠先生」は生徒からも卒業生からも敬愛される人格者だけあって、その態度はさすがである。

私は生まれ育った故郷の閉鎖的な社会と人間関係に嫌気がさし、出て行ったのだが、囚らずも戻ってきて生活したことで、昔同様、周囲と同調できなくて悶着を起こしている。地域社会における人間関係の質は私が見るかぎり、昔も今も変わっていない。地域の為政者はもちろん全員ではないにしても、そこに胡坐をかいて利権に走るだけで、衆知を統合するすべを持ち合わせていないかのようである。このことが地域社会を衰退させる一因にもなっているのだろう。

その具体的な事例として、久々に全国的な話題となった「津軽選挙」を挙げることができる。それは今年(2014)1月の平川市長選をめぐる選挙で、落選した前市長のほか、議員定数20人中15人の市議が公職選挙法違反で逮捕された買収事件である。「恥ずかしくて世間に顔向けできない」と、メディアのインタビューに

川の脇の、耕作が放棄された田んぼの水溜りに姿を浮かべるカルガモ。



建前論を答えていた議長も後日、本音が発覚し逮捕されている。この一件は、津軽地方の風土に根ざした地金としての人間関係を象徴するものである。

法律違反にはならないまでも、買収をバラマキ、あるいは施しと見なすならば、手を変え品を変えした、それに類する行為は私たちの日常に蔓延している。善し悪しの境界をどこに引くかの判断は人それぞれである。

行政と民間企業が癒着し、議会の承認を得て、税金を一部の人たちにバラマキ、もしくは施すという怪しげな問題を抱えている一件として卑近な事例を述べれば、弘前で少数の市民団体が取り組んでいる「岩木川市民ゴルフ場」の問題がある。ひとくちでいえば、岩木川の河川敷につくられた民間会社のゴルフ場の経営支援を行ない、経営破綻後の清算にまで税金を投入することの正否が問われているのだ。民間会社を運営する会社の社長が市長の後ろ盾ということもあり、市長絡みのスキャンダルに発展するかどうか注目される。自らが関与するゴルフ場を「公共施設」と、自分に都合よく位置づけているのだが、明らかに不正であり、これを承認する市議会もまた問題ありである。もしかりにゴルフ場が「公共施設」であるなら、他にもあるゴルフ場も「公共施設」として税金投入の対象になるのだろうか。私の散歩コースにある、打球がネットを越えて飛んできて市民を危険にさらしているゴルフの練習場も「公共施設」に該当するのだろうか。

「嘘も追従も世渡り」という諺があるが、私が住む地域社会ではそれが現実である。



散歩コースの道端に乗り捨てられた自転車。